九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[023_1985]第二十三回中央図書館貴重文物展観目録 : 西欧農学古典文庫の解題

九州大学附属図書館中央図書館

岩片, 磯雄
九州大学農学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/15540

出版情報：大学広報. 527, pp.1-8, 1985-01-30. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報 №527
昭和60年1月 30日発行
（編集）
九州大学広報委員会

第二十三回中央図書館貴重文物展観目録

（中央図書館）

西欧農学古典文庫の解題

は　じ　め　に

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展観資料の選定、解説、配列等については本学岩片磯雄名誉教授に御指導御尽力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

記

展観場所　：　中央図書館メインロビー

展観期間　：　昭和60年2月2日（土）から
　　昭和60年2月27日（水）まで

展観資料の解説

この文庫は長く九州大学農学部教授として在職されていた故小出満二先生（農業経済学担当）と故木村修三先生（農業経営学担当）の蔵書のうち、主として欧文の西欧古典農学に関するもの、および従来農学部図書館に所蔵されていた稀書、ならびにその後蒐集したものをあわせてできた文庫で、昭和35年12月に本学農学部の名で目録が作成されている。

主にイギリスとドイツの昔からの農書がかなり体系的に集められている。その詳細は図書館情報 Vol. 3, No. 11, 1967 に紹介してある。

註　年次の下にアンダーラインのあるのは、展示したものの出版年次である。

1　Sir Walter of Henley (c. 1200－c. 1283) －Husbandry, lst ed. about 1270, London, 1890.

カンタベリー大司教区に属する荘園の支配人(bailiff)であったとみられる著者が、荘園管理の要点を20数項目に分けて記述したもので、イギリス農書の中で最も古く、したがって初版の著作年次や著者の生没は明らかではない。初版本は羊皮紙にフランス語で書かれたが、著しく散逸していたものを、Elizabeth Lamond が編集し英訳して1890年に初めて出版した。ここに展示したのがそれである。おおよそこのころ Seneschaucy や Rules と題するものも書かれ、その著者名や本書との関連が明らかでないため、副題に示されているように、本書にはこの二つも含まれている。この書はその重要性にもかかわらず、数十年前にすでに入手が著しく困難になっていたので、その後の研究に則した再版が早くから計画されてきたが、近年ようやく次の書名で出版された。

Dorothea Oschinsky－Walter of Henley and other Treatises on Estate Management and Accounting, 1971, Oxford.

2　Fitzherbert, John or, Anthony (1460－1531) －The Book of Husbandry, 1523, London, 1882.

本書はイギリス各地の農業を視察する機会をもった著者が、農業改良のための第一の要点は適正な構造を持つ犂の利用であるとして、犂の各部の構造や機能を説明し、次に家畜導入の重要性について述べ、さらに当時極めて普通であった開放耕地（Champion land, 後の open field）の不利を説き、努めて囲込み地（Severall, のちの enclosed land）にすべきことを説いた。展示した1882年版は、原著再版の1534年版に基づき、巻末にはWalter W. Skeat による

Notes と Glossarial Index が附いている。それでもなおなかなか読みにくい本である。

3 Tusser, Thomas (1524－c.1580) －His Good Points of Husbandry, lst ed. 1557, London, 1931.

著者の経歴はこの版の冒頭に "The Life of Tusser" として9頁にわたって詳しく書かれている。要するに彼は Essex のある村に生まれ、Eton に学び、Cambridge に入るが、健康を害して退学し、初めは Suffolk、次で Norfolk で農業を営んだ。その間の見聞と体験をもとにして本書をまとめたが、好評を博して版を重ね、やがて次の " Five Hundred Points " を書いた。

本書は4月に始まり、翌春に終る農事暦の形式で書かれているが、そのあとには " Husbandly Furniture " の題で各種の農具を図版入りで説明し、最後は「農家の主婦たるものの勤め」で終っている。

本書は1970年に Newyork から Dorothy Hartley の編集のもとに出版されたが、内容は最後の Index に至るまで1931年版と差異がない。

展示の絵図はイギリスの当時の9月の播種時の光景。

4 Tusser, Thomas－Five Hundred Points of Good Husbandrie, lst ed. 1573, London, 1878.

Tusser の His Good Points が好評を博したので、内容を豊富にして本書を出版したのだが、前者との相違は農事暦を9月から始めたことで、これは農場の賃貸契約がこの月に始まるのに則したものである。すなわち、

At Michelmas lightly, new fermer comes in,
　new husbandrie forceth him, new to begin:

そして新しく随所に " A digression to husbandlie furniture " の説明を加えている。

5 Blith, Walter (c.1620－c.1690) －The English Improver Improved, lst ed. 1652, London, 1653.

著者は Yorkshire の領主であったが、Oliver Cromwell (1599－1658) の政治綱領に共鳴し、隊長としてクロンウェル軍に従軍し、しばらくアイルランドに滞在した。その間当時はなはだおくれていたアイルランドの農業を視察し、農業改良の必要を痛感した。

本書の中で著者は Herfordshire の二輪犂、一輪犂、無輪犂 (Plaine Plough, のちの Swing

plough）、二段犂（Double Plough）などを図示して、土壌と関連しての得失を述べ、次に従来からの作物に加えて、オランダで多く作られているセイヨウアカネ（madder）、ホソバタイセイ（woad）などの染料作物の外、各種の工芸作物ならびにトレフォイル（trefoyle）などの牧草の栽培法を述べ、人工牧草による自然草地の改良、暗渠排水などについて論じた。そうしてこのような改良の実現のためには、長期の小作契約制、とりわけ囲込みが不可欠であるとした。

6　Evelyn, John（1620－1706）－Silva : or, a Discourse of Forest－Trees, and the Propagation of Timber in his Majesty's Dominion, lst ed.1664, 2nd ed. London, 1776.

著者は名門の家に育ち、高い教育を受け、1661年王室科学協会（翌年王室協会と改称）会員になった。彼は当時すでに「霧の都」と呼ばれていたロンドンの街が、大量に燃やす石炭のために、空気を著しく汚染し、その証拠にアネモネが育たなくなったとして、1660年にその対策を国王に進言した。このころのイギリスは海軍力の増強のために、大量の硬木を必要としていたが、国内の森林はすでに少なからず伐採されていた。ために王室は Evelyn に造林についての著作を依頼し、それに答えて本書が出版され、やがて名著としてたたえられた。著者は本書の前半で樹木の一般論を述べ、後半で各樹種についての各論を述べたが、先づ初めにヨーロッパナラ（oak）について詳しく述べている。それはこの樹が軍艦の龍骨用材として不可欠だったからである。こうして本書は当時イギリスの造林の気運の高揚に大きく寄与した。

本書は出版後版を重ねたが、近年再版が出されている。

7　Evelin, John－The French Gardener, lst ed. 1658, 4th ed, London, 1691.

この著者名は John Evelin であって John Evelyn ではない。けれども後者と同じく Fellow of the Royal Society である。そして次回に展示予定の J. C. Loudon－An Encyclopaedia of Gardening, 2nd ed.1824. によれば、John Evelyn は1658年に同名の本を書き、内容も本書と極めてよく似ている。それで本書はその第4版で、著者名がミス・プリントされたものと考えられる。

本書はカブ（turnep）、ニンジン（carrot）、ダイコン（radish）、パースニップ（parsnip）などの野菜がフランスでは菜園で豊富に作られ、料理法もイギリスに較べて進んでいることを述べたものだが、これらの根菜類が後に集的な菜園ではなく、広い圃場で穀作と交替に作られて、貴重な飼料作物になることを考えると、本書に見られる Evelyn の指適は、非常に意義深いものがある。

8 Evelyn, John－Terra: A Philosophical Discourse of Earth, lst ed, London, 1678.

先に「森林」（Silva）を書いた著書は、植林について述べる前に、土（Soil）の重要性を説いた。これが動機になって土壌（mould）についての詳論を行ったのが、本書である。ここで土壌とは1フィートの深さの表土に限定し、それを堀り返した際の復元状態で、土壌の良否が判別できるとし、さらに堆厩肥（dung and compost）の施用によって豊沃になるものとした。

彼の所説を植物栄養学説のうえで位置づけるならば、van Helmont（1577－1644）による最初の水学説（water theory）が出るのが17世紀初め、次に今回展示した Jethro Tull による土学説（earth theory）の提唱が18世紀前半であるから、本書はほぼその中間に位置している。

9 Worlidge, John（c.1640－c.1700）－Systema Agriculturae: The Mystery of Husban－dry Discovered, lst ed. 1669, London, 1675.

本書に序文に "To the Gentry and Yeomanry of England" と書かれており、緒言ではギリシアの Xenophon やローマの Pliny（Gaius Plinius Secundus）の言葉を引用して農業の重要性を説き、本文は極めて広義の農業全般にわたって論述している。すなわち、全15章のうち、第6章では造林について、第12章は養禽、鳥類の捕獲、養魚、漁撈について述べている。さらに第13章は農事暦、第14章は天体と気象、最後の第15章は農業用語の解説で、これは古い農学書を読む際に非常に役立つ。その一例 Arders－Fallowings or Ploughings of Ground.

10 Mortimer, John（c.1656－c.1736）－The Whole Art of Husbandry, lst ed. 1707, fifth ed. London, 1721.

著者は本来ロンドンの商人で、後に王室協会の会員になった。性来農業を好み、1693年に Essex にある農場を購入し、農事に励むとともに、多くの農書を読んで本書を書き、王室協会に献辞した。

本書も John Worlidge の著作と同様、林学に属するものをも含んだ広範な農学体系の書である。休閑耕（fallow）の仕方や適正な犂の型については述べているが、このころすでに大きな問題になっていた休閑そのものが不可欠なのかどうかについては論及していない。ただ第2冊の「穀物の播種」の項で、コムギは12時間塩水にひたしてから播くことを勧めているが、日本でイネについて同様の処理をするいわゆる選水選法が、1882年に初めて工夫されたのと較べて興味深い。

11 Bradley, Richard (1688−1732) −New Improvements of Planting and Gardening, Both Philosophical and Practical, lst ed.1717, 3rd ed. London, 1719.

Bradley は極めて多作の人として知られ、1716年から1730年の間の著作だけでも20冊を超えるといわれる。彼は王室協会会員であり、1720年にはケンブリッヂ大学の植物学の教授になった。その著作の引用も広範にわたり、イギリス農書としては、ここに展示した Walter of Henley, Fitzherbert などの古いものだけでなく、ギリシア・ローマの農書にまで及んでいる。

あまりに多作だつたために、彼の著作目録の作成は困難とされるが、本文庫に所蔵の British and Irish Writers on Agriculture Compiled by W. Frank Perkins, Lymington, 1929. が最も詳しい。ここに展示した "New Improvements, 1719." は彼の最初の著作で、植物と動物との関係、植物の生育、土壌、各種の樹木、果樹、野菜などについて述べたものである。

12 Bradley, Richard−A General Treatise of Husbandry and Gardening, For the Month of April, lst ed. London, 1721.

本書の表題は4月となっているが、それは50ページまでで、あとは "For the Month of May," 111ページからは"For the Month of June," 次は July, August, September と続く。

4月は第1回耕起の大事な時期であるだけに、耕起、施肥に関する叙述が主内容である。7、8、9の3カ月を彼は農事暦の第二期と呼び、すべてのものの収穫期で、農民の労苦と熟練が結実する時期だとしている。

13 Bradley, Richard−A General Treatise of Husbandry and Gardening, For the Month of October, lst ed. London, 1721.

同じ表題のあとに "For the Month of April" のあとをうけて、10月から3月までの農事を月別に説明したのが本書である。10月は前月に穀作物を播種したあとで、重要な仕事はないが、本書ではここでクローバの重要性と採種法について述べているのが注目される。

14 Bradley, Richard−A Survey of the Ancient Husbandry and Gardening, lst ed. London, 1725.

著者は本書の中で、当時著名な政治家 Townshend 卿に献辞し、イギリス農業の改良は、古代のギリシア・ローマ農書を基にして実施されるべきこと、また序文ではオランダがアムステルダムにもっているような植物園を、イギリスも持つべきことを強調した。著者が古代農書と

して特に重視したのは、ローマの詩人 Virgil (Publius Vergilius Maro) の書いた「農耕詩」(Georgics) で、とりわけその中に書かれた休閑 (fallow) がイギリスでも不可欠なことを強調した。当時のイギリスでは三年または四年に一度づつ農地を作付せずに休閑し、その間、休閑耕と呼ばれる犂耕を繰り返していた。これが果して必要悪なのか否かについて、強い関心が持たれていた時代であった。そのような中で、本書は主に古代農書に依拠して、不可欠であるとしたのである。そのために本書は今回展示してある Jethro Tull によって、文献的ならびに実践的に批判されることになる。

展示した図はイギリス各地の手農具（左）とオリーブ（右）。

15 Bradley, Richard－A Philosophical Treatise of Husbandry and Gardening: by G.A. Agricola M. D., lst ed. 1717, London, 1721.

本書は Agricola がドイツ語で著作したもので、オランダ語に訳されて好評を博し、続いて Monsiueur がフランス訳を出版して名声を得たので、Bradley が英訳したものとされる。その原作は Max Güntz によれば、下記のものと思われる。

Ceorg Andreas Agricola, Doktor der Philosophie und Medizi－Vom Wachstum und der Entstehung der Bäume und den Methoden ihrer Vermehrung, 1716.

本書は単なる訳書ではなく、多分に著者の所見を交えている。その内容は副題にあるように、樹木、果樹に関するものが主で、播種、幼苗の生育、施肥ならびに弱りかけたときの処置法などに言及している。

16 Laurence, John (1668－1732) －A New System of Agriculture, London, 1726.

著者は本来聖職の地位にあって、農業とは無縁の人であったが、職業上各地を見聞し、多くの著述を読む機会にも恵まれた。こうして専門家ではかえって自明のこととして省略しがちな事項をも、よく整理してまとめた書だといわれる。だが反面、ある教養のある農民の書いた本から、多くを取入れたとの非難をもうけた。

左側の図は本書を献辞したイギリス内親王殿下の Richmond の邸宅と庭園。

17 Laurence, Edward (生没年次不詳) **－The Duty of A Steward to his Lord, London, 1727.**

一年前に著書を刊行した John Laurence が、その目次のあとに「農事に精通した自分の兄弟が近く著作を出版する予定」と公示したのに応じて、翌年出たのが本書である。著者はもと

もと土地測量士で、セオドライト・望遠鏡・水準器などを持ち回って、求めに応じて所領を測量し、精密な地図を作ったりしているうちに、領主の委嘱を受けて公正にその所領を管理すべき管理人（Steward）が、農業に関する領主の無知につけこんで不正を働いたり、あるいは農業の知識のないものが管理人になっていて、ために所領の農民が旧態依然たる農業を行っているような実態に省みて、彼が「改良農法」（improved husbandry）と名づけたものを取入れて、領主も管理人も農民もともに収入を殖やすべきことを論じたものである。

18　Tull, Jethro（1674－1740）－Horse－hoing Husbandry ; Compleat in Four Parts : lst ed. 1733, 2nd ed. London, 1743.

本書はこの文庫の中でも、とりわけ貴重なものである。

著者は初め法律を学んで弁護士になったが、後に農場を購入してその経営に専念した。そして化学、生物学などに関する広範な書物を読み、他方農業の長い体験から、植物の栄養は極めて微細な土であり、根はこれを吸収して生育するものと考えた。いわゆる「土学説」（Earth Theory）である。これをもとにして土を年間不断に深耕・砕土すれば、休閑することなくコムギを連作しうるものとし、そのために旧来の散播の代りに条播法を発明し、近代農業の基礎を作った。本書は当時あまりにも革新的なことを提唱したので、多くの非難や妨害にあった。そのためにここに展示した第２版は、初版に較べて一層詳細なものになり、巻末に厖大な補遺が附けられた。かくてこの第２版は再版と言うよりも、全く面目の新たな本になった。それが今日では世界的な視野からの稀書になったのである。

展示した図型は彼が発明した条播機で、その詳細な製図は折込みの中に示されている。

19　Tull, Jethro－The Horse－Hoeing Husbandry : or, A Treatise on the Principles of Tillage and Vegetation, edited by William Cobbett, London, 1822.

Tull の死後三年目に第２版が出たが、当時は Tull の提唱した新農法はあまり評価されなかった。ところが次回に展示する予定の Thomas Hale やフランスの Duhamel du Monceau などの本が18世紀の半ばすぎに出て、Tull の理論が脚光をあびてきたので、“Rural Rides, 1853”を書いて有名になった Cobbett が表題のような Tull の本を出版し、1829年に再版された。だが本書は Tull の真意を伝えるには、あまりにも無神経に編集されている。Tull が切角苦労して考案した農業機械に関する数章や図版ならびに補遺の大部分が削除されている。